

改題 土楽たより

どうらく

Kogure 農場 1月号 (NO81)

2017年1月10日 (火) 発行 (毎月10日)

【農暦】太鼓の音がお腹に響く！

○今年こそと思いながらいつもの日を過ごしている。恒例になっている布施弁天へ初詣に2日に行った。呼魂太鼓(注1)の音がお腹に響く、身体に沁みるような良い響きである。おみくじは末吉である。“よく磨けばこの石も玉となる”とあった。残念だが、磨き代(しろ)があるとは思えない。箱根駅伝は青山学院が3連覇を果たした。見える景色は同じに映(うつ)る。テレビも替わり映えがしない。同じに見えるが少しずつ変わって来ているようだ。長時間の時代劇はなくなった。だが、何となく昨年と同じ年頭の過ごし方になっているようである。運動不足の身体は重くなったような気がする。毎日サンデーの身なれども、始動せねばと思っている。

○門松飾り、玄關飾りはしてない家は少ない。カルタとり、トランプなどしている話を聞かない。少子化やスマホの普及があるのかもしれない。ご近所で羽根つきをする子供がいて、“正月”を見たような気がした。新鮮なもの？を感じた。諸行無常というが、良いものは残したいと思う。最近、変化の速さについていけないものが多くなっている。古きよきものは大事に残したいものである。(5日)

○笠間と柏を行き来しているが、その途中に、小野小町に因んだ場所がある。小野小町の墓もある。時々蕎麦を食べによる。一昨年の詩吟のテキストに“色見えで移ろふものは世の中の 人の心の花にぞありける 小野小町 (古今和歌集)”があった。百人一首には、“花の色は移りにけりないたづらに 我が身世にふるながめせしまに”が選ばれている。現代訳にすると<花の色は移り、美しさが衰えてしまったのね、何もしないで、私の身が恋の物思いに悩んでいる間に>となる。生没年不祥、平安時代初期に活躍した歌人で、出自も経歴も謎に包まれているとある。というが、筑波山麓のこの地にゆかりのものがあつたのだらうと思う。深く詮索する積りはないが、正月の風物詩であつた「百人一首かるた」も残したいものの一つである。

○やり残し作業から少しずつ始めたいと思う。ブルーベリーの剪定や畑の片付け・整備などしたいと思っている。昨年の見直しや計画も作らねばと思う。ハードルはより低くして、出来たら“質”を維持したい。一休さん(注2)の格言である“なるようにしかなら



<呼魂太鼓>お腹に響く太鼓。初詣の布施弁天で。2日撮影

ない”で今年も行きたい。試行錯誤のマイペースでいいと思っている。

短歌2首

新しさ 少しずつ減る 元旦に
初春を 寿箸に 留め見る
寒の内 ひっそり咲く 白椿
けなげと清楚 無くなりし身に

注1、呼魂太鼓（こだまたいこ）とは；柏の和太鼓集団の名前である。こだまとは、樹木に宿る精霊『木霊（昔、こだま echo は霊の仕業と信じられていた）』のことであり、その木をくり抜いて作る太鼓の中には魂が宿ると言います。太鼓を打つ事で、その魂を呼び起こし、一方通行でなく、こだま echo の様に行き交い、響き合い、人々の魂を呼び起こす。それが「呼魂太鼓」の願いです(HP から)。

注2、一休さん；室町時代の禅僧・一休宗純。とんちで有名な一休さん。しかし、その生涯は反骨の破戒僧であった。天皇のご落胤という出自。ご存知と思うが。



＜白椿＞西日本では寒中に咲くと。布施弁天の境内で。2日撮影

【楽農】黒豆・小豆の莢とりと選別作業！

＜畑A＞；片付けなど

*霜柱で植え直した玉葱苗は何か？
空豆は不可に

＜ハウス＞；片付けなど

＜畑B＞；白菜収穫（僅かだがハウスに保存）

*黒豆、小豆の莢とり、プラムなどの剪定 ING
*カボチャ、キュウイ、黒豆、小豆の出荷



＜黒大豆・小豆の赤、白、黒＞や
つとここまで。27日撮影

【楽市】イベント交流・直売など

○その他；共生の会忘年会（17日）詩吟福原会・忘年会（21日）に参加など。

【つぶやき=Tweet】シモバシラという草花がある！

○“地中の水分が凍り無数の氷柱が地表に林立する光景が目につかぶ。霜柱だ。そのような氷柱を作る植物をご存知だろうか。その名もシモバシラといい *keiskea japonica* という学名の頭語（属名）は「圭介の」を意味し、黎明期の博物学者、伊藤圭介に捧げられている。＜略＞植物名の名付け親は、おそらく江戸時代末期の本草家、飯沼慾齋である。”と「てんとう虫1」の“はな日和”の欄の最初に書かれていた。シモバシラという草花が

あることに驚いた。杉並から柏に引っ越しした時に霜柱を踏みザクザクした感触が嬉しかったことが思い出された。土を踏まない生活をしていたからである。霜柱は笠間では珍しくないが、畑の霜柱は「シモバシラ」が作った。そんな事はない。シソ科のシモバシラは関東地方、四国、九州の低山や里山に見られる多年草で、9-10月に開花するという。機会を作って探してみたいと思った。

○下手の横好きの小さな1つで、誘われて短歌の会にちょっと参加したことがある。これがキッカケになって、正月に短歌を詠むことを数年続けている。前頁の短歌2首がそれである。まさに、恥ずかしながらである。こんなこともあって、百人一首には関心があった。古今和歌集を始めとした勅撰集から、藤原定家が更に秀歌を選び抜いて編纂したのが百人一首だと謂う。勅撰集は四季、恋、雑の三本柱で出来ているというが百人一首には43首と恋の歌が多い。人間の悩みや悲しみや苦しみといった感情には共感を生む。演歌が廃れないのも同じものがあるように思える。



<増長天>生育、増長する力から五穀豊穡を司る南方の守護神(四天王の1神) 2日撮影

○藤原定家は“来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに 焼くや藻塩の身もこがれつつ”と歌っている。現代訳すると<来てくれない人を待つ、私は松帆の浦に藻塩が焦がれるように、恋にこの身も焦がれつつ>となる。最近、頻繁にある短絡的な男女の事件のニュースに触れるたびに、恋に、愛に二の足を踏むのではと心配になる。生涯独身が5人に1人の今の社会状況では寂し過ぎると思わずにいられない。小野小町の“色見えで”が載っていた同じテキストに柳原白蓮の“傘さして田植えする人目に入れば 勿体なくして拝まんとする”が載っていた。この感謝の心情も今は中々持てない。何か一番大事なものが無くなって来ているように思えてならない。柳原白蓮と言えはNHK朝ドラ『花子とアン』で仲間由紀恵さんが演じるモデルである歌人で、宮崎龍介と駆け落ちするなど波乱の人である。大正天皇の従妹でもある。大変な時代の人の方が心豊かに見えてしまう。自由で、おおらかに生きたいものである。

○肯定感が少ない。いつも否定的なもの言いになってしまう。芥川龍之介の「奉教人の死」で“人の世の尊さは何ものにも換え難い、刹那の感動に極まるもの”と云っている。百人一首の多くを知らないが“刹那の心情”が歌われていると推察できる。肯定感の無さは刹那の感動の無さなのかもしれない。引用が多すぎて読みにくいものにしてしまった。

【後記】、凍土の畑、霜柱を踏むのもし。笠間に、kogure農場にお越し下さい。HPのアドレス(右記)が変わりました。【特に編集せずランダムな構成にします】

発行者；kogure農場・小暮虎雄
住所；笠間市本戸4201-10
携帯電話；090-9333-4135
メール；torao-k@nifty.com
HP；<http://avaharu.my.coocan.jp>